

# MEMO & VOICE

CLUB FAME

マスコミ

## 角川書店をヒン子に立たせた 弟・歴彦派の逆襲

昨年末、新たに設立された出版会社、メディアワークスが「食らえ、五連発。一挙創刊だつ!」のキヤッチフレーズを引っさげ、あの角川書店に対抗する競合五誌を創刊した。

ただ、新雑誌を創刊するだけなら、さ

ほど問題にもならないのだが、何を隠

そう、このメディアワークスという会社。昨年末、角川書店の子会社、角川メディアオフィスの会社員71人中69人が退社組が設立した会社なのだ。社名もさることながら、新創刊となる雑誌名はそつくり。内容の方も先行誌とほぼ同じとくれば、ただ事ではないムードありあり。では、いつたい何が原因でこのような問題が生じたのか。それは、角川書店の総帥、春樹社長による実弟の歴彦前副社長の追放劇に端を発する。

昨年の9月中旬、歴彦氏が突然辞任。自ら育ててきた雑誌部門の関連会社ザ・テレビジョン、角川メディアオフィスの社長をも降りた。路線が違う兄弟のいさかいのなかで、自分が辞めれば角川グループが丸くおさまると、歴彦氏が身を引いたというわけだ。しかし、事は氏が考へる以上に複雑だった。

角川書店の本業以外の投資でかなりの借入金を抱えている角川書店は、好調

な伸びを示す、ザ・テレビジョンとメディアオフィスを歴彦氏の退任と同時に吸収合併することを決定。メディアオフィスの社員にしてみれば、いくら自分たちの雑誌で稼ごうと、これならお金をドブにするようなものと、まず、元事務の佐藤氏が退社。後は前述したとおり。結果的には、歴彦氏の退任がメディアオフィスを壊滅状態へと追い込んだ。

角川側は、五誌の編集部にフリーのスタッフなどを引き集め、とりあえずの急場をしのいでいるというが、もちろんこのまま黙つてはいない。佐藤氏はじめ、メディアワークスの首領格を任務違背行為と業務妨害行為で告訴。春樹社長の息子、太郎氏までがその証拠集めに走り回り、辞めた社員には一人につき、5億円の損害賠償を請求するなどと言いたじたりで、事態はまるに泥沼化。とりあえずの応急処置として、春樹社長は、社内的人心掌握に努めているというが、この一件で春樹社長のワンマン経営ぶりが浮き彫りにされたという感もある。恐ではこれを歴彦派の逆襲と見、「神がかり」とあがめられた角川春樹氏も、もはやここまでか? とその行く末に興味が寄せられている。果たしてこの勝負どちらに軍配が上がるのか。結果は、読者のみぞ知る!

社会

## 大ヒンシュク、大迷惑 豪州花嫁失踪カラ騒ぎ事件

「女心と秋の空」とはよくいしたもので、昨年末、オーストラリア、日本とインター・ナショナルな騒ぎとなつた「豪州ハネムーン「花嫁失踪カラ騒ぎ事件」はこの話を端的に表しているのではないはずはないだろうか。

事の内容は今さら説明するまでもないが、日本人の新婚カップルが、ハネムーン先のシドニーで、妻がショッピングに出かけたまま帰らないと夫が現地

警察に通報。捜索願が出された。日本、オーストラリアを巻き込む騒動となり、妻の自作自演の狂言。まったくもて人騒がせな話に終わつた。

後の記者会見で「結婚前に、夫とうまく行くかどうか不安になつた。軽い気持ちだつたんです。」と事件の中心人物となつた元妻は承認したが、その

言葉の一つひとつがどうもスッキリしない。結婚を前にした女性が、皆一度は抜け出したい気分になるというの

は、そう、珍しい話ではない。それどころか、当然ともいえる女性ならではの心理である。しかし、この場合、その理由を述べてはいるものの、どうも合点がいかない。なぜなら、失踪中の花嫁の元上司によつて予約されてい

るからだ。花嫁が逃げ出したくなるとしたら、そしてそれを実行してしまうとしたら、きっと発作的な衝動に駆られてのことだろう。そうでなければ、一度決まった結婚をそれ相應の理由もなく蹴ってしまうなどという思いきつたことはそう簡単にはできないはずだ。すると、1ヵ月も前から失踪を計画していたこの女性は、いったい何が目的だったのだろう。たぶん夫に自分のことを心配させ、やきもきさせたかっただけなのだろうか。だとしたら、騒ぎに巻き込まれた人間はエライ迷惑な話である。

それにしても、この事件が、男性はもちろん同じ女性からも理解されなかつた一番の理由は、元妻がいわゆる世間一般でいう美女でなかつたことではないだろうか。もし、この女性がハッとするような小悪魔的な美女なら、元夫もあんなに露骨に公衆の面前で、謝罪する妻の頭を払いのけたりはしなかつたかも知れない。もし、元妻が美女があつたら、予約をした上司との関係も、マスコミはもつともつと知りたがつただろう。今ならたとえ一人に何か関係があつたとしても、それはどうでもいい事実でしかない。人を容姿で判断するなど断じてあるまじき行為ではあるが、美女であるか否かで、世間の印象は大きく違うということを、何となく実感させる一件であった。

スポーツ

## 笑えない長嶋一茂

父の存在は大きすぎた

「ミスター・ジヤーンツ」長嶋茂雄が12年ぶりに巨人軍監督に就任。世間の期待と注目が一気に集められる中、ドーラフトでは、星稜高校の怪物クン・松井選手を1位指名で獲得するなどとい先のいいスタートを暗示させた。そして長嶋監督就任にまつわる一番の話題といえ、実の息子元ヤクルトスワローズの一茂選手の巨人軍入団。これをおいて他にないだろう。

テレビ、マスコミの騒動ぶりは今さら説明するまでもないが、気になるのは入団の決まった当の本人、一茂選手の表情。正式記者発表の席でも、周囲の過熱ぶりとは対照的に、終始憮然としている。記者団の質問にも「笑ってられない」と不満気な口調で切りかえす。それもどうだ。

この入団により、ますます、一茂選手は必ず偉大な父、長嶋茂雄の影がついに消えまい。一茂選手の存在は、茂雄・一茂このふたが揃わぬして有り得ないということになる。

そして、それはいままでもなく、一茂選手の童心とは対極に位置するものである。ある朝のワイドショーで、司会者が「4番サード長嶋」というのをや

親の七光というには、芸能界やこうした世界では珍しくはないが、一茂選手の父は偉大過ぎた。ミスター・ジヤーンツ長嶋茂雄の息子に生まれたが、なんとか実力を発揮させてやりたい。ということらしいが、果たして父、長嶋茂雄のもとで、一茂選手は眞の実力を発揮することができるのだろうか。たとえ、それができたとしても、そこにはやはり情報過多の現代が象徴されてしまうのだ。一茂選手の存在は、茂雄を着せるのは、あまりにも残酷過ぎてまわるのだろう。

一茂選手にジヤーンツのユニフォームを着せるのは、あまりにも残酷過ぎてまわるのだと、一茂選手の存在は、茂雄を着せるのは、あまりにも残酷過ぎてまわるのだろう。

## 現象

### 小中高校生の読書離れ

情報過多の時代を象徴する!

	小	中	高
0冊	12%	46%	60%
1冊	11	16	14
2冊	12	11	9
3冊	8	8	6
4冊	9	5	3
5冊	8	4	3
6冊	3	3	1
7冊	2	1	1
8冊	11	0	0
9冊	10	3	1
10~15冊	11	1	1
16冊以上	10	1	1

<1カ月の平均読書量>

他、読書の効用についての間に関しては、各年齢層とも、1位に知らないことがわかつたと、読書本来の役割を十分に満たしていることも明らかになつた。にもかかわらず、読書離れが顕著になつていくのはなぜだろう。それに分に満たしていることも..

# ソフィアがお手伝いします。

普通の生活では、なかなか希望の結婚相手が見つかりませんよねー！その様な方に…。



あなたの

彼女の理想のパートナー

(結婚相手)

にめぐり会えます！

・幸運ダイヤル(確実で秘密厳守)

**0120-181-567**

・つながらない時は

006-390-3427

結婚願望を、持っている

**男性会員5,000名**

の中より貴女に合う方をコンピューターが厳選しますので、相手の希望と自己PR(写真1枚)電話番号を至急申し込み下さい。入会金等必要ありません。

●申込先 〒532 大阪市淀川区西中島4-12-12  
第3実業ビル3Fソフィア事務局クラブフェイム係